

思 い 出

私は軒下に腰を下して、ヤツデの葉から落ちる雨だれの音を身じろぎもせずに見つめていた。軒下に居るとは言っても目の前に落下する雨だれの一滴一滴が足元の赤黒い土を混ぜては跳ね返し、私の体をいたずらに汚してくる。

朝から食事もせずにここにじっとしている私の前を、何人もの人々が一様に黒い衣装に身を包んで俯き加減の姿勢で玄関を潜っていったのはもう一時間以上前になるだろうか。

奥さんも今日は沈んだ表情で黒い衣装の客を迎え入れるだけで、私になど何の頓着もない。しかし、私が朝から食事もせずに昼下がりの雨だれを見ているのは別に奥さんのせいではない。奥さんは、まだ客足の見えぬ早朝の内に私の為に大好き物の「スキヤキおじや」を作って小屋に入れてくれたのである。しかし、今の私にとってスキヤキおじやなど何の用もなさないのである。

今の私の胸の中にあるものは、仁（ひとし）さんの元気な声、それも山彦を聞くような

「アタオ、アタオ、アタオ〜」

という声が永遠に聞かれなくなったことへの悲しみだけなのである。

坊主の読経の声と、時々聞こえてくる噛み殺したような嗚咽とを障子越しに聞くだけで私の胸の痛みも更に深い所に落ち込むように思えて、濡れた体を舐めることすら忘れているのだ。

私は正座したままでそっと目を閉じて仁さんの声や顔、手……思い出そうとしていた。すると玄関の前に一台の黒い車が止まった。前の方に赤い旗が雨にぬれて萎れたままで付いている。車の中からカメラを持った男が出て来て、カーキ色のコートを着た男の傘に入って近づいてきた。

カメラの男は突然……、私にとっては本当に突然であった、

「ああ、この犬か」

と言って連れの男のひじを突くと、カメラのケースを外し始めた。

「うん、これだ。飼い主と十年間山に登っていたらしい。だが、飼い主が死んじゃ……、いや亡くなってね」

「とにかく一枚撮ろう」

カメラの男はファインダーを目に持っていく仕草を始めた。

私は犬の分際でカメラというものがどういうものかを知っていた。と言うよりも、仁さんが私に教えてくれたのである。

あれは何年位前のことだっただろうか、とにかく仁さんがまだ独身だったことは確かなことと記憶している。春先のことだった。木の芽は柔らかな色をしていた。仁さんは「オータケヤマ」とか言っていた。頂上で私にシャッターの押し方を教えてくれた。私の前足をつかむと、カメラの上のイボのようなところに乗せてグイと押した。奇妙な四角い箱は「ガジャ」と音を立てた。それから何度かこのようなことをやらされる内に、私はこの四角い箱の上のイボを押す時に発する爽快な機械音が好きになった。

仁さんは喜んで何度もやらせてくれた。

ところが、ある日数枚の厚手の紙を見せられて驚いた。どうもどこかで見たことがあるような風景なのである。中の一枚は、仁さんが木の根に腰を下している。最後の一枚を見ると、何と自分がいるではないか。私は当惑した。考えても見たことがない、過ぎた日の自分の姿がこの紙の中にある。仁さんは私の驚いたような顔を見て面白がったのか、度々私にこの回想紙片を見せてくれるようになった。

その内に私はあることに気が付いたのである。

この不思議な回想紙片の中の思い出は、あの四角い箱の爽快な機械音を聞いた時のものなのだ、するとあの四角い箱のイボは、私に思い出を与えてくれるボタンなのだ。

それ以来、私はイボを押すことを性急にせがむようになり、仁さんが見せてくれる紙片の数も増えてきた。私は確信を得た。仁さんが「カメラ」と言っている奇妙な四角い箱は、過ぎた日のことを思い出させてくれる機械なのだ。

今私の前に立っている男は、私の姿を一枚の紙片に収めようとしているが、誰の為にだろうか。

仁さんは私の為に何度となくシャッターを切ってくれた。しかし今の私には、主を亡くした無残な自分の姿を将来思い出すことなど考えもつかない。じっと仁さんの面影を思い出そうとしていた私の心は乱された。

いつもの私なら一声ならずとも攻撃に出たかもしれないが、今そんな力はない。スキヤキおじやも食べたくないほどに打ちひしがれた気持なのである。

私は黙って腰を上げると、軒下を出て表通りに向かって歩き出した。

カメラの男は慌てて口笛を吹いたり、どこで聞いてきたのか私の名を呼んだ。

「アタ、アタオトロ・・・、ネーと何だっけ、いやめんどくせえ畜生、長え名前だからなあ」

私は後も振り返らずに歩いた。もしかしたら後ろ姿を撮られたかもしれない。

四つ角で振り返って見ると、まだ二人が下りた黒い車は玄関の前に止まったままだった。

左に曲がって大学の庭へ行ってみることにしよう。

大学の庭は最近の仁さんを思い出すのには恰好の場所である。

トラックへ行ってみると、仁さんよりずっと若い一人の青年が雨に打たれて走っている。濡れた草々は足をくすぐるようにまつわりついて、なお一層体を濡らし、体が重くさえ感じられる。大きな木の下で身震いをして水気を切った後腰を下した。

トラックを眺めていると、ずぶ濡れになって走っている青年がいつの間にか仁さんに見えてきた。

夏と冬に約一週間の山旅に出る仁さんは、その直前になると必ずと言って良いぐらいこのトラックを走っていた。この山旅は私が同行することを許されない旅なのだが、その代わりにこのトラックで一緒に走ることを許してくれる。毎年繰り返されるこのトラックでのランニングがあると、私はいつも「近いうちに置いてきぼりを食うらしい」ことを感じ取っていた。

学生時代の仁さんはここで走ることは殆どなかったが、十日と家にいることはなかった程に山へ出かけていたように憶えている。そしてその内の何回かは私も一人前の顔をして同行させてもらっていた。

しかし、サラリーマンになってからは月に一度位しか山へ行くことができなくなったため、このトラックでのトレーニングを努めて行っていたようだ。ところが私同様に歳をとったせいだろうか、近頃では夏と冬だけになってきた。

このトラックでの一カ月にわたるランニングが終わってからの一週間というものは、私にとってそれは手持無沙汰な日々である。長い長い一週間が終わって仁さんの登山靴のずっしりした響きを門口に聞いた時は、私はいつも誰の制止も聞かずに鎖もちぎれよとばかりに啼き叫んだ。他の人にはわかってもらえなくても仕方がない。私の待ち焦がれていた一週間後の仁さんへの慕情の表現はこれしかないのだから。

そして、その晩のスキヤキおじやは私がこの上なく好んでいる仁さんの手製のもので、私が常々感激しているのはどんなに疲れた顔で帰った時でも必ずご馳走してくれることである。ある時は鍋の中にクルミの実を、またある時はワラビやゼンマイを見いだして、遙かな山並みとそこを汗を流して歩く仁さんの姿を思い浮かべるのである。

数え切れぬほどの回想紙片の中には、私の姿の代りに逞しい山仲間達の姿や夏冬問わず白く化粧をした山並みがあるのだった。仁さんは指をさしてひとつひとつ教えてくれたが、犬の私にはそんなに多くは覚えていられない。クロベ・ヤクシ・ヤリ・アイノ・シラカバ・ハイマツ・・・・・・・・。

そう、その昔、やはり一週間の旅を終えて回想紙片を何枚か見せられた時に、その中に一枚、逞しい山男に混じって一人の女の人が写っているものがあつた。その人はそれからしばらくしてから私たちの家に住み着くようになり、仁さんに負けぬほどの味のスキヤキおじやを食べさせてくれるようになった。

仁さんは、「スミチャン」と呼んでいたが、「スミコ」と呼ぶようになり、最近では近所の人が呼ぶように「オクサン」と呼ぶこともある。

私など、「アタオコロイノナ」という長い名前ひとつしか持っていないのに、この人は一体いくつ名前をもっているのだろうか。

青年はややスピードが落ちたようではあるが、まだ走り続けている。青いランニングシャツ、パンツ、脛、ちょうど今の私のように泥を浴びて実に奇妙な風態に見える。

草むらのざわめきに驚くと、尻尾の横に小さな蛙がチョコナンと座って私を見上げている。蛙は雨に肌をつやつやと光らせて、私の胸から足先までを眺めまわした後、大きな木の根っこに向かってまたジャンプ

ングを始めた。雨を受けて生き生きとした躍動感を感じさせる蛙に比べて、今の私の姿はあまりにも惨めである。そう、仁さんがよく冗談でこんなことを言っていた。

「お前が死んだらゴンスケにして山に連れて行ってやるからな」

純毛の背中ももうずぶ濡れでゴンスケにもなりそうもない。おまけに時々発作でも起きたかと思われるような「ブルン」と来る震えと悪寒。どうやら、仁さんが最も嫌っていた「カゼ」と言うやつを引いたようだ。

じっとしていると「ブルン」が気になるから少し歩くことにする。

駅前の商店街は夕暮れ時の混雑で、ウロウロしていると蹴飛ばされてしまう。

美味しそうなコロッケの香りにハッと立ち止まると、デブの肉屋さんの前。私のスキヤキおじやには欠かせない立役者である。時には冷めてはいるがコロッケをひとつふたつポケットにねじ込んで持ってきてくれることもあるが、このデブさんの存在を私の心に強く焼き付けるものは、スキヤキおじやとなって私の腹に入って行く牛肉、ただそれだけである。

思い出、とりわけ食べ物の思い出になってみると、再び自分が空腹の絶頂にあることが脳裏に蘇ることになる。今朝のスキヤキおじやを食べずに出てきたことが悔やまれる。しかし、こんなことで仁さんの思い出を手繰り寄せる糸がこんがらかってしまったのでは申し訳ないような気がする。

デブの肉屋さんの前を立ち去るとコロッケの香りも牛肉の味覚も私の感覚を離れて、次第に薄暗い静かな町外れに向かっている自分に気が付いた。自分が今追い求めているものは仁さんの幻影しかないのだ、ということ再び認識し、味覚に翻弄されかかった記憶の糸を徐々に引きもどしながら、薄暗い街灯の明かりを辿って行くと、徐々に仁さんの姿が網膜に流れ込んできた。

あの日は……、山の木や草々の色は既に褐色に変じて、いつもならば初霜が見られる頃だった。昼前からの俄か雨で私の小屋は雨宿りの登山者で一杯になってしまった。実ににぎやかだが、この季節ではこのような混雑は珍しい。突然の人ごみに困惑している間に、いつの間にか私は小屋の片隅に追いやられてしまった。誰が火を付けたのかストーブもいつしか赤い炎を上げて燃えだしていたが、ストーブの脇の私の席は何やら薄汚い姿の男に占領されてしまった。戸口に座り込んで半ば不服面をしていると、私を乞食とでも思っているのか、数人の若者達がビスケットを投げてよこす。とんでもない、こう見えてもこの私はこの山に暮らすれっきとした山犬だ、こんなものは食えるものか。

やがて夕暮れが近くなるにつれて、三々五々麓の集落を目指して出て行った。

今夜は落ち着いて眠れないのかと一時は腹だたしい思いになり始めたが、夕暮れになって昨日までの静寂に戻る気配が感じられて、ようやく巻きこんでいた尻尾も天を向くようになった。

ところが、まだまだ安心はならぬ。外は真の暗闇になったというのに一向に腰を上げない一群がいる。腰をあげぬどころか数人の一群は寝そべてペチャクチャと喋っている。どうやら彼らは私の家に泊ろうとしているらしい。

私は心して無関心を装い、戸口に散乱したゴミを蹴散らしながら空腹感を紛らせていた。私はいつも食事になると沢浴いのこの小屋を出て稜線に登り、谷間の白い流れを見ながら山を一つ越え、さらに沢に下る。そこには雨の日も雪の日も一棟の山小屋に暮らす老夫婦が待っている。今見知らぬ若者が私の住居を荒らすかもしれぬと思うと、どうしても老夫婦の待つ小屋まで食事に行く訳には行かない。

暫く相互不侵の時間が経つ内に雨の叩くドラミングも消えて、静かな山の中に今日も夜の足音が忍び寄ろうとしている。

空腹と焦慮の時間は遂に破られた。

彼らは闇に響く金属音をたてて食事の支度を始めた。その金属音が私を我に還らせたのである。

今から小屋まで行くのも面倒だし、雨にぬれた草むらや灌木の間を潜ることは億劫に感じられる。今夜は横着をきめて不貞寝としよう。

来なくてもいい邪魔者が来たために……と私は内心不穏な気持ちが起ころうとするのを押さえ押さえ、板の上に横になった。

鼻孔をくすぐるような香りの中にもフカフカした炊き上がりが感じられる飯の匂い。人間以上に敏感な嗅覚を持つ犬にとって、この誘惑に断固として背を向け続けるのは難しいことである。

やがて飯の匂いが消えると、今度は私が未だ味わったことがない香りが嗅覚をくすぐり出した。

杉林の中の小屋ではいつも同じものばかりを食べていたので、私は米の味、味噌汁、中身はジャガイモ・

タマネギ・ワカメ・・・。味覚で判別がつくほどの数しか食べ物を知らない。

今、背中の方から匂ってくるものはなんだろう。細心の注意で鼻孔を広げると、グツグツと音を立てながら流れてくる香りの中にわずかにタマネギとジャガイモが含まれているように感じられる。それ以外の物、特に喉にまで刺激を与える汁の香りは何者だろう。

食器が触れ合う音が彼らの食事の始まりらしいことを知らせてくれた。人一倍旺盛な好奇心をもって自認する私が、わずかな嗅覚のみの体験で納得する訳がない。少なくともあの神秘の香りの食べ物とはどんな物で、彼らはどのような食べ方をするのだろうか。それだけでも嗅覚に加えて体験の頁に記したくなってきた。

横着に寝返りを打つと、ローソクの炎が揺れる中で三人は私の好奇心など知るよしもなく一心不乱に神秘の味に舌鼓を打っている。中の一人が手前の一人に何やら語りかけると、三人の視線は私の目に集中した。手前の一人が箸でつまんだ細長い、ローソクの炎の上に湯気を上げる物を私の方に突きだした。

薄暗い灯りの中のその顔は私に何ら疑心を促すような表情ではなく、むしろ私に仲間入りすることを進めているように見える。表情から察するに、彼が突きだした箸の先に下がったものは私に与えようと思っ

ているものらしいことがわかる。おまけに、それと同じ物を今彼らが食べている。悪意によるものではなく、毒物でもなさそうだ。

さっきまで横柄に不貞寝を決め込んでいた食欲がにわかに鎌首をもたげ、さらに彼らと近づきになってもよかろうという気持ちが腹の底に動き始めた。

恐る恐るローソクに近寄って見ると、彼らは三人とも悪人の面構えではなさそうだ。箸の男は鍋の蓋に私の分を入れると腰の横に置いて、私が石橋を叩くように鼻を近づけているのを心配そうな表情で注視していたが、私が安心して一口付け始めると満足そうな顔で自分の食器に戻った。

さっきから私の鼻孔をくすぐり、嗅覚をつつき、咽頭を刺激しては好奇心を叩き起こしていたあの香りは、目の前に湯気を立てる細長いこれなのだ。暗くて色がわからないのは残念だが、タマネギ・ジャガイモの間に登場するそれは、ヤマゴボウのようにスジがあり、汁を吸い込んだそれが奥歯の間で摺れた時、その歯触りと汁の味、何とも言えない未だかつて味わったことがない味である。

私は夢中で食べた。腹が減っているからではなく、神秘の味覚に酔いしれてである。彼は私の食器が空になるとまた満たし、また満たし、遂に大鍋が空になると自分の食器まで差しだした。おそらく人間の場合でもそうだろうが、好奇心が満たされた時の気持ちほど素晴らしいものはない。彼らに対してあわや抱きかけた不穏な感情は全く消え去り、彼ら、特に箸を差し出した若者に対する信頼感と友好的な心が芽を吹いてきた。

考えて見ると、私とスキヤキおじやとの切っても切れない関係はこの日に生まれたようだし、この箸の若者が仁さんだったわけだ。

錯乱する頭脳の中で辛うじて初対面の日を思い出すことができた私は、薄暗い住宅街を抜けて遥かに山並みを眺めた麦畑の中の道を歩いている。電車の音も遠鳴りになり、いつしか雨が上がった空には星がひとつ、ふたつ瞬き始めている。人影はまったくくない。

食事が済むと私の腹の内を知り尽くしているかのように、欲するまでもなく器に入れた水が出てきた。いつしか私は彼らの仲間の一員としての扱いを受けていた。私の首筋に手を置いた彼は、談笑の中で私に名前を付けたようだ。傍らの雑然とした荷物の中から一冊の本を取り出してパラパラとめくっている内に「アタオコロイノナ」

と言うと皆で笑った。

それが私に付けられた名前だとわかったのは、それから寸刻経ってからのことである。

彼は私の目を見ながら何度か、長ったらしく奇妙な「アタオコロイノナ」を連発した。

「アタオコロイノナ」

意味はわからないが、その声が出た時に振り向くとそこには彼の目があるから、これは私に対する呼びかけで、杉林の小屋の老夫婦が言う

「オーイ、コイコイコイ」と同じ意味だと判断できる。

山の朝、太陽が姿を現す直前に空が呼びかけるようにかすかに明るくなってくる。気の毒なことだが、

この光景には人間、特に都会の人間にはわからない良さがある。ほの白くなってきた空に、あたかも踏み
にじられて臍物がはみ出した芋虫のように太陽が出てくる。

多くの人間はこの日の出を凄く大騒ぎして見るようだが……。

私はほの白い空、いったい何が始まろうとしているのかわからぬがひどく厳粛な気分させられるこのひ
と時が好きである。明け方の散歩は私の日課なので、三人が眠っている枕元から床下にもぐり、そして小
屋の外に出た。ここらで一番高い山に登っていつもの方角に目を向けると、白んだ空の一点にミカン色の
丸い物が現れ、それは次第に大きくなり、遂には白くなってしまふ。輝くミカンの化け物は天気の良い日
には必ず見られる。今日も天気が良くなるに違いない。

小屋に戻ると彼らはまだ寝ているらしく静寂そのもの。私は少々悪戯気を起して、立てかけた梯子から屋
根に上がった。屋根のてっぺんで朝顔のように日の出の歌でも歌って、寝ている連中を叩き起こしてやろ
う。そう思ったまでは良かったが、よく考えて見ると、私が朝の歌声を張り上げた所で人間である彼らに
は何を歌っているのかわかる筈がない。

まあ、とりあえず煩く騒げば寝ている連中を驚かすことはできる。

一步、また一步、トタン屋根はしっとりと濡れていて思うに任せない。三步進んでは滑り、爪を立てると
厭な音がする。爪を全部剥きだして、後一步でてっぺんに到達という所まで来た時、木立の突然のざわめ
きに驚いて振り向いた瞬間、反転した体はトタン板を景気よく滑り出した。ハッとして手がかりを求めた
が何もない。爪は「キーっ」と感じの悪い音を立てて、梯子の下に投げ出されてしまった。したたか打ち
つけた腰の痛みを耐えて呻り声を上げてみると、彼らは小屋の扉を開けて出てきた。せつかくの悪戯っ気
も大事にならぬどころか痛い思いまでしてしまった。

遅い、私の感覚ではそう感じる朝食を済ませると彼らは大きなザックを背負って小屋を出た。勿論、昨夜
の食事以来私は仲間の一員になったと思っているから、当然のように後に続いた。道端の草木は雨で濡れ
た体に朝の光を受けて輝いている。何とはなしにうれしい朝である。

昨日までとは変わって、今日は私は三人の人間達の仲間入りをしている。山に暮らす私が、おそらく遠い
町から来たであろう彼らよりは遥かに歩き慣れている。先頭に立って歩いている時には自分が偉くなった
ような気さえする。

遥かに白い川の流れや、茶白くただれたような山肌がいつもと変わらぬ表情で私を見上げている。右手の
小藪に入って見ると、赤茶色の乾燥した葉が足元でビスケットのような音を立てる。藪のビスケットと戯
れていると、その中を青い細長い蛇がススーっと出て来て細長い舌をヒョロヒョロ、……………

いつも見慣れたものではあるが、何ということなく心が躍る。そう、人間の仲間入りしたからだろう。次
から次へと小藪をくぐり抜けて、ヤマバト、ヒキガエル、、狸の糞や椎の実にまで朝の挨拶をする。
藪から出ると三人は既に二つの起伏を越えて三つ目を登ろうとしている。駆け足で追い付く道を兎が横切
って行く。

突然いなくなつては傍らの藪から飛び出す私を彼らは喜んだ。でも、こうでもしないと重い荷物を背負っ
ている彼らと体一つの私とではスピードに差があり過ぎるのだ。

一日が過ぎるのがこんなに早いと感じたことは今までになかった。

もうすぐ赤い空にミカン色の玉が吸い込まれる光景が見られるだろう頃、いくつの山を越えただろうか、
何匹の蛇に出合っただろうか、何個の椎の実を蹴っただろうか、我々は小さな川の畔の集落に辿り着いた。
山の上から眺めた白く光る蛇のような流れがすぐ目の前にある。材木を一杯に積んだトラックが何台も走
り抜けるし、人間の数もだいぶ増えてきた。

彼らはリンゴのような電灯が点いた家に私を連れて行った。腰に色々な物を下げた男の人と何やら話をす
ると、小さな紙に走り書きをして出て行ってしまった。私をリンゴの灯りの家に置き去りにして……。
私は狭いコンクリートの家の中で狂犬のように泣き叫び、暴れ狂った。固く閉ざされたガラス戸越しに私
の叫び声が聞こえるのか、三人は時折振り返りながらトラックの陰に消えて行った。

信じて仲間になった人間達は、泣き叫ぶ私のことなど構いもせず……。こんなことになるのなら小屋
に泊らせてやるのではなかった。殺気を込めて吠えついて追い払ってやればよかった。

しかし……、昨夜の食事は旨かったなあ。

腹立たいやらバカバカしいやら、悔しいやら悲しいやら、今までののびのびとした山での生活とは打っ
て違って、私の目の前は暗闇と化した。

一日、二日、・・・・・・コンクリートのリンゴの家での不快な日々、イライラする気持ちはやがて消えて、どうにでもなれと自暴自棄になり始めた日、私は運命の焼印が押されるような緊張した時間を持つことになった。

昼前に現れた小太りの男は私を小さな箱に押し込むと、私の反抗など物ともせず・・・・・・車に乗せられたように憶えている・・・・・・、そしてリンゴの家を後にした。

さあ、私を待つ物は何だろうか。

大鷹が飛び交う岩の上に連れて行かれるのかも、いやママシの家、イタチの餌食、それとも・・・・・・

あらゆる恐怖の想像が交錯する中、車は揺れたり止まったり、曲がったり、バックしたり。

長い、それは長い不安な旅だった。

箱から出されると、そこには私を置き去りにして帰った三人の内のひとりがニコニコ笑って手を伸ばしている。私を撫でまわして飲んでい様子だが、私には何とも解せない。仲間に入れてもらったかと思えば私を置き去りにしたり・・・・・・。まさか再び会うこともなかろうと思った彼が目の前にいる。

水溜りの中の月が風に笑っている。人通りのなくなった畑の中の道は、所々に僅かに光る街灯以外は何の添え物もなく、今の一人さびしい私の気持ちそのものである。この道をどこまでも行けば、車の往来が激しい国道に出られる。

国道、私をかくも惨めなどん底に突き落とした・・・・・・。

そうだ、国道へ行ってみよう。仁さんが隣のロクのようにトラックの下敷きになった、息も途絶えて全身から肉汁のような血を流して倒れたあの場所へ。

もしかしたら、思い出ではない本物の仁さんが生き帰って国道の黒いアスファルトの中から浮かび出てくるかもしれない。

もしかしたら、もしかしたら・・・・・・

もしかしたら、またあのスキヤキおじやの味が見られる。

気は焦るが腹が減っていて走ることもできない。国道で仁さんの面影と巡り合ったら家へ帰ろう。奥さんも心配しているに違いない。思わず知らず舌の渴きを憶える。

四本の足と尻尾にまとわりついた泥の塊が煩く揺れて気を散らす。耳を澄ませると自分の足音だけが怪しく響きながら私を急きたてるように追いかけてくる。

聞き慣れてはいるものの犬の遠吠えが暗闇の幕を割くように震えてハッとさせる。

遠吠え、都会のそれは低い空に吸い込まれてしまい呆気ないが、山ではそれは蜿蜒と奈落の底にまで届き、また帰って来る。長い余韻の帯を引きずって、段々に梢の中に消えて行く。

自分の存在を天空地底にまで宣言するかのよう山々の遠吠えは私を心行くまで満足感に浸らせてくれる。

仁さんと一緒に山に登るようになってからどの位経ったころだったろうか。

そこは今まで私が山と言うもののイメージとして抱いていた物とは全く違った所だった。肌で感じる涼風と目に入って来る植物がそう知らせてくれた。

背の低い松の木が地面に這うように生い茂っている程度でそのほかに見える植物と言え、冷たい岩にへばりついた乾いた苔ぐらいしかない。

這いつくばる松の間の白い砂のような地面を、仁さんは荒い息で登っていた。私は見たこともない植物と秋口を思わせるような涼気に驚きながらすぐ後ろに続いた。谷間に白く光る蛇のような流れが見られないところから、いつもより高い所にいるということが辛うじて感じられた。

登りつめた所は小さな石仏の乱座する白い砂地で、ここはすでに這いつくばる松も存在せず谷間から吹き上げて来る風も一段と強く涼気をぶつけてくる。

前の方に黒い大きな犬小屋のような形をした山、それは今自分が立っている砂地よりさらにさらに高く聳えている。その横に猪の背を思わせるような堂々とした山、その横に禿げ頭のように頭の天辺だけを白くした山、後には真っ白な三角帽子、・・・・・・。あまり多くの、それぞれ風変わりな形をした山々が並んでいるのに度肝を抜かれていると、傍らの小岩に腰を下した仁さんも私に負けぬぐらに感激しているようだ。流れる汗をぬぐい、何やらブツブツ言いながら首を回してあたりを眺めまわしている。確かにここは私が松と風に驚いたように、今までとは違った山なのらしい。

私が長く垂らした舌を揺らしながら頭で息をしていると、仁さんはスックと立ち上がった。両手を口の横

に円く添えて、肩で大きく吸い込んだ息を一気に吐き出して

「イヤッホーッ」

驚いて舌を引っ込めようとしている私の頭上を

「ホーッ」

返事が谷間から帰ってきた。

よくよく耳を確かめて見ると、この仁さんの叫びは何の意味かは解らぬが我々が夜の空に向かって吠え上げる時のあれと同じようだ。

再び頭上を往復する響きを聞いている内に好奇心と言おうか、私も一声という気になった。

真似をして肩で息を吸い込んで思い切りやってみると、仁さんも驚いただろうが私も驚いた。いつも耳の中に籠り響く自分のがなり声の後に谷間から戻ってきた返事は意外にも美しい音色をしている。

「ワッオオーッ」

仁さんも負けてはいない。今度はひとときわ大きく、一段と長く

「イーッヤッホーッ」

「オウオオーッ」

この時の数日の山での暮らしは実にこれに明け暮れした感があった。

テントの中で食べたスキヤキおじやと共に忘れられぬ思い出となった。

ひと声の遠吠えに引かれるように四方の暗闇の中からそれぞれの思いを込めた声が乱れるように飛び交い、また静かな世界が復元する。

耳に慣れた一時ではあるが、復元した闇の静けさは常になく深々と胸を締め付ける。

雨戸から幾許かの灯りが漏れる畑の中の一軒家を過ぎると国道に近い。

冷たく白い照明の中を走り抜ける光の流れが僅かに視界に入ってきた。

国道のアスファルトは雨の名残を留めて黒く光り、走る二筋の光をどんよりと映している。

信号を二つ越えたところ、今でも網膜にありありと残っているアスファルトの上の白い線とどす黒い血の流れ、周囲を取り囲む無数の人だかり、猫の喧騒を思わせるようなけたたましいサイレン、赤いランプの点滅。

アスファルトに横たわった仁さんはもう動かなくなっていた。

硬直して動かない死体がタンカで運び去られた後のアスファルトに、残像のように白いチョークで人型が描かれていた。

運び去られた仁さんは二度と私の前には姿を見せてくれなくなってしまった。

アスファルトの上に白いチョークの線を思い浮かべて見ると、そこには「くの字」になって横たわった仁さんが見えてくる。

そして仮想の白い線を凝視していると、時の流れに逆行するかのように仁さんは生き返り私の側に来る。

二人は静かな草原を戯れながら走っている。

瞬きをすると、草原も仁さんも白い線も消え去り、まるで世界の違った現実が大きなトラックや小さな車を足早に往来させている。

試みに再び凝視すると、アテツギのある黄色いテントが出てくる。恐る恐る中をのぞくと、青い寝袋の中に仁さんが気持ちよさそうに寝息をたてている。

「ワン」

ひと声吠ええると寝袋が割れて顔が飛び出す。

そしてまた国道の車の往来の中に自分が引きも戻される。

山小屋、薄汚れたザック、黒く重い登山靴、ロウソクの揺れる炎の中の歌声、谷川のせせらぎ……。

絶え間なく様々な光景が流れて行く一点は、意識を現実に戻せば単に車の往来する国道に過ぎないのだが、思い出を蘇らせるスクリーンである。

意識は次第に現実には戻りにくくなっていく。なぜなら、私が今望んでいるものは今は亡き仁さんの面影でしかないからである。

思い出はさらに入念に脚色されてスクリーンに投影されてくる。それは単なる思い出ではあり得なくなり、

ある時はそこが私の犬小屋であったり、ある時は松の根っこであったりする。

黄色やピンク色の花が咲き乱れる、そこは確かに山の上なのだが平原のようにだだっ広い丘、下には円く白く光る湖、大きな谷を隔てて雲の上に浮かぶ峰々は白い雪を残している。

寒い冬が明けたことを歡びあうように飛び交う蜂たちの乱舞と、花から花へと移って行く蝶の群れは私の恰好の遊び相手である。

蝶の踊りの邪魔をしている私の横ではフランスパンをかじりながら仁さんが八方の眺めに見入っている。

薄汚れた地図を片手に遠い山並みを数えては悦に入っている。

蝶を追って私は丘のてっぺんまで来てしまった。見下ろす眺めは夢のように広がっている。春を謳歌するように咲き乱れるお花畑と、点在する小さな池、遠い白い山、揺れるカゲロウ、燦々と照り注ぐ日差し。丘の中腹の仁さんは花に囲まれて大きなゼスチュアで欠伸をすると花の中に横になった。

丘の上で私が

「オッオーーッ」

とやると、横になったまま手を上げて仁さんが返事をする。

上から見ていると花の中の昼寝が随分気持ちよさそうに見える。

昼寝の邪魔に来る蝶を「ワンッ」とひと声驚かせてやるのも面白そうだ。

私は一気に丘を駆け下りた。中腹の平坦な所まで来ると、お花畑の中に仁さんの寝息が聞こえる。

仁さんの鼻の上を二匹の蝶が舞っている。

寝ている仁さんと二匹の蝶の踊りの邪魔をせぬように、私は草むらのざわめきに気を使いながら一步一步近づいて行った。

あと二歩で、その時、

虹彩を収縮させるような大きな光と、

キューーン

というタイヤの滑る音、

ハッ、と思った瞬間、

二匹の蝶は飛び去り、仁さんもお花畑も消え去ってしまい、あたりは真っ暗になった。

腰から背骨を伝わって頭の先まで行きわたる大きな衝撃・・・・・・・・・・。

(昭和 42 年 11 月 30 日)

あ と が き

長く続けてきた山歩きという道楽の中で何度か風変わりな犬との出会いをした。私は格別犬が好きな訳でもないが、これは忘れ去るのは惜しいなと思うような体験がふたつあった。

昭和 37 年 11 月、奥多摩の川苔山に登った後にわか雨に襲われて舟井戸小屋で雨宿りをすることになった。雨は止んだがもう夕暮れが近いので先に進むことは止めてこの無人小屋に泊ることにした。雨が止むにつれて雨宿りの客は下山して行き、小屋は我々三人だけになった。

と思ったら、足元に一匹の犬がいた。この犬は夜を共にしたばかりか、翌日我々のパーティに加わって県境の稜線を縦走して日原に下山するまで同行した。山道を知っているようで、先頭を歩いて我々との間があいてしまうと待っていてくれたりする不思議な犬だった。どこまでもついて来てしまう犬に閉口して、日原の交番に犬を預けて我々は帰宅することにした。泣き叫ぶ犬の声を聞きながら氷川行のバスに乗ったが、この時の情景がしばらく脳裏から消えなかった。

もうひとつは、昭和 38 年 8 月、裏丹沢の神ノ川から入り桧洞丸を越えてユーシンに下る山旅の時のこと。

初日は橋本から夕方のバスで東野に入り、暗闇の中を長者舎山荘に 22 時半に到着した。年老いた親爺さんが営む山小屋には一匹の犬がいた。親爺さんと犬の間には意思の疎通が感じられた。親爺さんが何か言うと犬は頷いて反応していた。その日は遅い晩飯を食べて 24 時過ぎに就寝した。そして翌朝、我々は驚きの体験をした。

小屋の外で親爺さんが「ヤッホーー」とやると、この犬も二本足で立って「ヤッホーー」。

我々が発すると、犬は先頭に立って歩き始めた。先導してくれているような歩き方でしばらくの間同行した。試みに我々が「ヤッホーー」とやると、この犬も二本足で立って「ヤッホーー」。

後年得た情報によると、昭和 41 年に親爺さんが亡くなり、犬は行方がわからなくなったとのことだった。

この二匹の犬との出会いの出来事は「時が経って忘れた」では惜しいような稀有な体験なので、何かの形で残しておきたいと考え、昭和 42 年秋に私はこのような駄文を残したようだ。

当時人気を博していた北杜夫氏の「ドクトルマンボウ」シリーズの中に登場する「アタオコロイノナ」を犬の名前として借用した。登山家でもある著名な作家のヒット作品から無断で拝借させていただいたと記憶している。

この駄文の手書き原稿が本棚の一隅から出てきたが、40 余年の時を経て損傷が始まっていた。崩壊する前に電子化保存をしようと考えてパソコンに入力することにした。入力が終わわり、最終確認作業を終えた日に北杜夫氏の逝去が報じられたのも奇縁と言わなければならない。

(平成 23 年 10 月)